

『カーランダ・ヴェーハ』の研究

——メッテ校訂本とサマスラミ校訂本の相違点——

佐 久 間 留 理 子

I はじめに

インドにおける観自在信仰を説く代表的な經典の一つに、『カーランダ・ヴェーハ』(Kāraṇḍavyūha) (KV) が知られている。この經典には、A.D.630 年頃に比定されているギルギット写本が存在することから、七世紀初頭までに、西北インドにおいて成立していたものと推定されている。この經典には、観自在の精髓を表わす六字の呪文¹⁾、即ち「オーム、マニパドメー、フーム」とその功德が説かれるとともに、観自在による生類救済の説話等が述べられており、六、七世紀頃の西北インドの観自在信仰を知る上で重要な資料であると言える。

さてこの經典のサンスクリットには、散文で書かれた KV と韻文で書かれた『グナ・カーランダ・ヴェーハ』とがあり²⁾、散文のものには、十二世紀 (A.D.1196) のネパール写本を使用したサマスラミ校訂本 (S 本)³⁾ と、ギルギット写本を使用したメッテ校訂本 [Mette 1997] とがある。これらの中、サンスクリットの散文については、メッテ校訂本において、S 本とギルギット写本との間の異同が比較対照され、両者の間に直接的な対応関係の見られる部分と見られない部分のあることが解明されている。しかしこれらの中、互いに相違する箇所において、六字の呪文に関する説話や観自在に関する図像について、如何なる内容上の相違点があるのかという問題は、従来の研究では十分に考察がなされていない。そこで本稿ではこの点に焦点を当て、各々の特徴について指摘したい。

なおメッテ校訂本に使用された二本のギルギット写本の内、一本 (G2) は断片であるので、ここでは、もう一本の写本 (G1) に基づき考察する。但しこの写本も完本ではなく、文は断続的である。

II KV の構成と相違箇所の位置

KV の内容構成を、完本の S 本に従って簡単に紹介しておく。まず第一部第一

章では、菩薩や神々等が祇園における釈迦の説法を聞きに集まる様子が説かれ、第一部第二章から第十六章には、観自在が様々な生類を救済する話が説かれる。次に第二部第一章では、観自在が具える三昧の説明や釈迦の過去世物語が説かれる。第二章では、観自在の毛孔に黄金や銀でできた山々と樂園があり、六字の呪文を祈念する者は、このような毛孔に生まれ、再び輪廻しないことが説かれる。第三章から第六章までは、六字の呪文の功德とその呪文を求める如来や菩薩の説話、また六字の呪文のマングラが説かれる。第七章には、観自在の毛孔の説明に加え、観自在が祇園の釈迦の所へ行き、自らの生類救済の報告等を行うこと、また観自在がマヘーシュヴァラとウマー妃に授記を与えることが述べられる。第八章では、観自在の福德と三昧の説明や、釈迦が過去世で観自在と普賢菩薩との三昧競争を見たことが述べられ、最後に釈迦の阿難に対する説法が説かれる。

これらの中、S本とG1との間で互いに相違する箇所は、S本の第二部第三章(冒頭を除く部分)、第四、第五、第六章と第七章(冒頭部分)に相当する。これらの箇所[Vaidya1961: 292, 1.20-301, 1.14]は、観自在の精髓である六字の呪文について説かれた部分であり、經典の重要箇所において両者の伝承が異なるものとみなされる。

III 相違箇所の内容

G1とS本との間で互いに相違する箇所の内容について見てゆく。まずG1の相当箇所(fols.45b-76a)は、便宜上次の四つの部分に分けられる。

(1) 世尊(釈迦)が、一切除蓋障菩薩に、百の困難な行をなしても六字の呪文を得ることはできないと説き、六字の呪文と印の功德、例えば六字の呪文を受持し印を結ぶものは、不退転の菩薩となり、千八の三昧を得ること等が説かれる。そして除蓋障菩薩が、一切の生類に六字の呪文を知らせるため、その獲得方法を世尊に尋ねる。

(2) 世尊の所を去った菩薩が、彼を貶めようとたくらむ悪魔マーラに対抗し、淨居天に賞賛される。そして菩薩は、六字の呪文のために多くの貴重なもの、例えば筆記用具⁴⁾として自らの身体(血や骨)を捧げる意思のあることを述べる。淨居天に六字の呪文は得られるのかと尋ねられた菩薩は、それを求めて再び出発する。そこでマーラは、刃のついた道を作り出すが、菩薩はその刃で足を切られながらも道を進み、ついにはマーラの作った燃える炭の中にも入る。次に説法師(dharmabhāṇaka)が現れ、その説法師のために供養が行われ、その福德が説かれる。

これに続く部分 (fols.54a-67b) は欠損し、内容は不明である。しかしこの後にも菩薩の試練に関する話が続くことから、この欠損部分には、それに類する内容が説かれていたものと推測される。

(3) 菩薩はマールによって毒を盛られ、サーラ樹の森の中に落ちる。以上のような試練を経験してから、除蓋障菩薩は帝釈天によって阿弥陀の浄土に連れてゆかれ、阿弥陀によって困難な行を成し遂げたと誉められ、六字の呪文と印を獲得する。そして菩薩は阿弥陀の浄土を去る。

(4) マラヤ山に住するマヘーシュヴァラが、観自在の姿を見たいと切望するウマー妃に観自在を本尊とするマンダラを説く。

他方 S 本の相当箇所は、便宜上次の三つの部分に分けられる。

(1) 世尊 (釈迦) が、除蓋障菩薩に六字の呪文の功德を説き、菩薩がその獲得方法を尋ねる。

(2) 世尊が、過去世において六字の呪文を求めて蓮華上 (パドモットマ) 如来の所を訪ねた際に、その如来から聞いた話を、除蓋障菩薩に説く。その話は、蓮華上如来もかつて六字の呪文を求めて無数の世界を彷徨い、ようやく阿弥陀の浄土で、六字の呪文を観自在から獲得したというものである。この話では、観自在が、蓮華上如来に六字の呪文を授ける際、未だ六字の呪文のマンダラを見ていない者には授けられないと言い、そのマンダラを説示する。

(3) 除蓋障菩薩が世尊に六字の呪文の伝授を懇願する。それに対して世尊は呪文の功德を説き、その呪文を受持する、戒を守らず妻帯する説法師を求めてヴァーラーナシーに行くことを勧める。菩薩はそこへ行って説法師を手厚く供養し、六字の呪文の伝授を願い出る。そこで説法師は、観自在の許可を得た上で、その呪文を菩薩に授ける。

IV 相違箇所の比較

上述した G1 と S 本の内容における相違点について比較検討する。

まず両者に共通するテーマの一つとして、除蓋障菩薩が六字の呪文を求めてそれを獲得する話がみられるが、獲得の手段、方法に関し、両者の間に顕著な相違点が見出される。即ち G1 では、菩薩は悪魔マールの試練に耐え、阿弥陀の浄土で六字の呪文を獲得する。しかし S 本では、そのような筋書きは見られず、菩薩は、かつて蓮華上如来が阿弥陀の浄土で六字の呪文を得たという説法を聞いた後、世尊の勧めに従い、ヴァーラーナシーへ行き、説法師からその呪文を授けられる。

ここで呪文の授与者として登場する説法師は、スタッドホームによれば、タントラ的な行者 (Tantric-style yogin) と解釈されている [Studholm2002: 81-84]。その理由として、この説法師が、「大成就者 (mahāsiddha)」と呼ばれるタントラ行者のように、戒を守らず妻帯する道德超越論者であるとともに、呪文や持明者と密接な関連をもつことが指摘されている。例えばこの説法師が、六字の呪文を授ける能力をもつグル (師) とされていること⁵⁾、またこの呪文を唱えれば「持明者の転輪王 (vidyādharmacakravartin)」の灌頂を得るとされていること⁶⁾ 等である。さらにスタッドホームは、「持明者であること」は、タントラ仏教における宗教的な努力の主要な目的の一つであり⁷⁾、持明者はタントラ仏教において顕著な存在であると指摘している。このように戒を守らず妻帯する者であり、且つ持明者の灌頂を得ることのできる呪文を受持し伝授する能力のあるグルを、タントラ仏教的な存在とみなすならば、S本で説かれる説法師は、タントラ仏教的な行者と言うことができるだろう。

上述のように、六字の呪文を獲得する手段、方法に関し、G1では、菩薩によるマールアの試練の克服に重点が置かれているのに対し、S本では、菩薩が説法師を訪ねて呪文の伝授を願い出ること重点が置かれている。

第二に、観自在に関する図像について相違点を述べる。まずG1のマンダラ⁸⁾は、除蓋障菩薩が六字の呪文を求める話が終わった後、マヘーシュヴァアがウマーに説示したものとされる。マンダラには、三つの宮殿があり、中央の宮殿には観自在が、その右の宮殿には阿弥陀が、左の宮殿には釈迦が存する。釈迦の上方には、除蓋障菩薩が描かれているものと思われる。その他、マンダラには、サーガラ龍王や持明者、プシュパダンティー (Puṣpadanti)、虚空蔵菩薩、ハリティーも説かれているが、図画での正確な位置は分からない。なお持明者が存するので、このマンダラは呪文と関係するとみられるが、それが六字の呪文かどうかは明確ではない。一方S本には、G1のようなマンダラは説かれていない。S本に説かれたマンダラ⁹⁾では、中央に阿弥陀が存し、その右にマハーマニダラ菩薩が、左に六字の呪文を体現した四臂の女神が存し、さらにその女神の足元には持明者が存する。またマンダラの四門には大王が存し、四隅に満瓶がある。

以上の二つのマンダラを比べれば、まず本尊が相違する。G1のマンダラでは、観自在が阿弥陀と釈迦の間に存するが、これは、経典の次のような内容と関係があると思われる。即ちこのマンダラが説かれた後、観自在が祇園の釈迦の所へ行行って生類救済の報告をすることが述べられているが、その際に阿弥陀から釈迦

に対して贈られた蓮華を、観自在が世尊（釈迦）に捧げたことが説かれている¹⁰⁾。従ってこの經典では、観自在が、阿弥陀と釈迦とを結び付ける役割を果たしていると思なされる。このように、このマンダラの構図には、二人の如来の間をとりもつ観自在の仲介者としての役割が投影されているものと思われる。

一方S本のマンダラでは本尊は阿弥陀であるが、これは、六字の呪文を求める蓮華上如来が、阿弥陀の浄土でこのマンダラを説示されることと関係していると思われる。つまり阿弥陀を本尊とする構図によって、このマンダラが阿弥陀の浄土で説かれたものであることが示唆されている。またこのマンダラでは、六字の呪文が神格化、視覚化され、四臂の女神となり、阿弥陀の脇侍として組み込まれ、六字の呪文の存在が強調されている。さらにS本のマンダラでは、釈迦の姿は無く、マハーマニダラ菩薩が置かれている。こうした図像表現は、G1には見られないものである。このように、S本のマンダラでは、G1と比べて釈迦の重要性が後退し、阿弥陀と六字の呪文の存在が重視され、強調されている。

V おわりに

G1とS本との間の相違箇所に関し、少なくとも二つの注目すべき相違点がみとめられる。第一に、除蓋障菩薩が六字の呪文を獲得する手段に関し、G1では、マールによって仕組まれた試練の克服が重視されるのに対し、S本では、呪文を受持する説法師が重視されるという違いがみられる。S本に説かれるこの説法師を、スタッドホームの言うように、タントラ的な行者とみなすならば、この相違は、S本がG1と比べて、タントラ仏教的な性格をより強めていることを示すものと言える。

第二に、観自在に関する図像について相違点が見られる。G1のマンダラは、六字の呪文を求める菩薩の話とは直接に関係しておらず、六字の呪文に関わる図像もS本のごとく明確に示されていない。その代わり、このマンダラの構図には、阿弥陀と釈迦の間をとりもつ観自在の仲介者としての役割が投影されているものと思われる。一方S本にはG1のようなマンダラは説かれていない。S本に説かれるマンダラでは、釈迦の重要性は後退し、阿弥陀や六字の呪文が重視され、強調されている。これは、このマンダラが、六字の呪文を求める蓮華上如来の話と直接に関係していることによるとと思われる。このように、S本のマンダラは、G1のマンダラよりも、六字の呪文と密接に結びついている。

以上の二つの相違点を見る限り、S本は、G1と比べてタントラ仏教的な性格や

六字の呪文に関わる図像表現がより顕著であると思われる。

- 1) この呪文は “śaḍakṣarī-mahāvīdyā/ śaḍakṣarī-vidyā” と經典に述べられているが、ここではこれらを「六字の呪文」と便宜上統一して訳す。
- 2) [塚本他 1989: 142-143] 参照。
- 3) サマスラミによって 1879 年にカルカッタで出版されたものと同一のテキストが [Vaidya1961: 258-308] によって再版されている。
- 4) 六字の呪文を書写するための道具と思われる。
- 5) [Vaidya1961: 299, 1.13].
- 6) [Vaidya1961: 293, 1.8]
- 7) 例えば『マンジュシュリー・ムーラカルパ』では、儀礼の執行によって「持明者の転輪王」となる可能性のあることが説かれている [Przyłski1923: 306].
- 8) [Mette1997: 116-117, fols.74b-75a]
- 9) 第二部第四章に説かれる [Vaidya1961: 296].
- 10) [Mette1997: 130, fol.81a5-7], S 本の第二部第七章 [Vaidya1961: 303, 1.28-29].

追記 (本稿は、平成 17 年度科学研究費補助金基盤研究 (c) 「パーリ語およびタイ語写本による東南アジア撰述仏典の研究」 (研究代表者 畝部俊也) の研究成果の一部である)

参考文献

- Mette, Adelheid, 1993, “Remarks on the Tradition of the *Kāraṇḍavyūha*.” *Aspects of Buddhist Sanskrit, Proceedings of the International Symposium, on the Language of Sanskrit Buddhist Texts*. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies, pp.510-519; 1997, *Die Gilgitfragmente des Kāraṇḍavyūha*. Swisttal-Odendorf: Indica et Tibetica Verlag.
- Przyłski, Jean, 1923 “Les Vidyārāja contribution à l’histoire de la magie dans les sects Mahāyānistes.” *Bulletin de l’Ecole Française d’Extrême Orient*, 23: 301-368.
- 佐久間留理子 2005 『『カーランダ・ヴェーハ』の研究序説～サマスラミ (ヴァイドヤ) 校訂本と漢訳との比較対照から～』『中世インドの学際的研究』平成 14-16 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (A) (2)) 研究成果報告書 (研究代表者 前田専学) pp.200-215.
- Studholm, Alexander, 2002, *The Origins of Om Maṇi Padme Hūm: A Study of the Kāraṇḍavyūha*. New York: State University of New York Press.
- 塚本啓祥他 (編著) 1989 『梵語仏典の研究 IV 密教教典篇』平楽寺書店。
- Vaidya, P. L. (ed.), 1961, *Mahāyāna-Sūtra-Saṃgraha*. Part I, Darbhanga: Mithila Institute.

〈キーワード〉 仏教説話, 観自在, 『カーランダ・ヴェーハ』

((財) 東方研究会・研究員 博士 (文学))

it is necessary that Sāriputta's death should have taken place on the way of Buddha's last journey from Rājagaha to Kusinārā. But in one of the suttas of *Samyuttanikāya* Sakyamuni is informed of Sāriputta's death when he stays in Sāvattihī, which he does not visit on his last journey. Although the commentator avoids this contradiction by assuming a lacuna in the description of the *Mahāparinibbānasuttanta*, we can hardly accept this idea.

This paper intends to clarify the various intricate traditions related to the death of Sāriputta found in the Pali scriptures and its commentaries as well as the Northern traditions i.e. those of *Samyuktāgama*, *Ekottarāgama* and *Mūlasarvāstivādinaya*.

73. A Study of the *Kāraṇḍavyūha*: differences between the Mette edition and the Samasrami edition

Ruriko SAKUMA

The Mette edition of the *Kāraṇḍavyūha* presents differences between the Gilgit Manuscripts and the Samasrami edition (reprinted in the Vaidya edition). This paper focuses on the stories about the six-syllable formula (*om maṇipadme hūṃ*) and the *maṇḍalas* about Avalokiteśvara in those editions, and points out that as far as the discussed portions are concerned, the latter edition seems to present a more stressed expression of the six-syllable formula and more *tantric* aspects than the former.

74. “netti” and the “Nettipakaraṇa”

Ken'ichi FURUYAMA

In this short article, I treat the discussion between Arabinda Barua and Bhikkhu Ñāṇamoli concerning the positioning of the *Peṭakopadesa* and *Nettipakaraṇa*. Arabinda Barua said that the *Nettipakaraṇa* is earlier than the *Peṭakopadesa* because the word “netti” appears in the *Peṭakopadesa*. He considered the word “netti” to indicate the *Nettipakaraṇa*. To this claim, Bhikkhu Ñāṇamoli said that the word “netti” is a noun, not a proper name.